



これからの時代に求められる主体性をいかに育むか？

「自分ごと」化し、「本物に触れる」 醍醐味が主体性を育む

日本では「主体性」「主体的」という言葉がよく使われる。どうやら、日本人は「主体性」がとても好きなようである。「主体性をもって」とは、よく言われる叱咤であるが、そう叱咤されたから主体的になれるほど、事は簡単ではない。主体性とは一体何か。どのように育成すべきものか。それへの唯一の正解などは存在しないように思える。しかし他方で、コロナ禍の現在、未経験の事態に直面する現在こそ、教員の側にも学習者の側にも、この「主体性」が問われているのではないだろうか。本号では、主体性とは何かを考え、いかに育成すべきかを探る。

まとめ／教育ジャーナリスト 友野伸一郎

● 現代社会が求めている「主体性」

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、1年前とはまったく異なる光景が広がっている。社会的にはソーシャルディスタンスを保った生活、リモートワークの普及とともに、対面のサービスの苦境が続いている。そして教育の世界では、長期間続いた休校措置、リモートラーニングやブレンディッドラーニングへの取組が求められる事態になっている。

誰もが予期しなかった事態に対応して、世界でも日本でも懸命かつ多様な取組が始まっている。こうした事態のなかで求められるのはどのような能力だろうか。

そのような事態においては、当然、先例主義では対応不能である。誰かの指示を待っていれば、どこからか正しい答えがもたらされるわけではない。

自分の知識と経験のすべてを組み合わせ、正解のない問題に向き合って、解いていくことこそが、唯一の正しい途なのである。

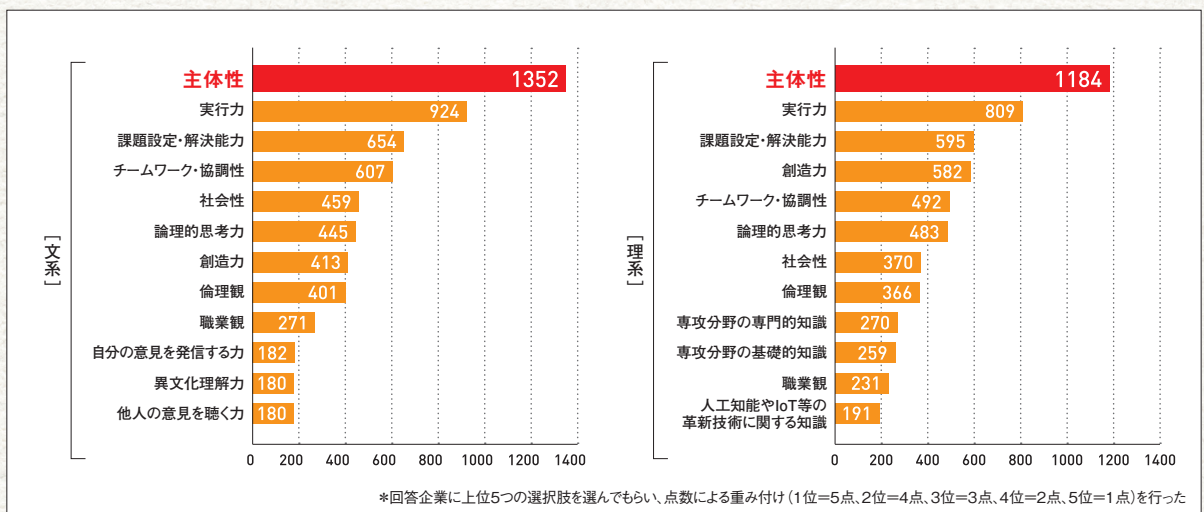
このように考えてみると、教育関係者にとっては既視感をもたられるのではないだろうか。そう、これこそまさに、総合的な探究の時間や、主体的で対話的な深い学びを通じて、生徒を育てていくべき方向性として語られてきたことだからだ。

そして、今まさに、そのような事態が^{しもつたい}出来している。

もちろん、これはコロナ禍のような極端な事態を想定して語られてきたことではないだろう。SDGsや格差社会の解消、そうしたなかでのあるべき企業活動の担い手の育成を想定して語られてきたことが、このコロナ禍のなかで想定以上に先鋭な形で突きつけられている、ということにはほかならない。

では、こうしたことが不断に問われるこれからの社会において、最も求められる能力とはどんな能力だろうか。例えば多くの

図1 企業が学生に求める資質、能力、知識



出所／一般社団法人日本経済団体連合会「高等教育に関するアンケート結果」2018年より 上位12位までを抜粋

日本企業は、それは「主体性」であると考えている。

日本経済団体連合会が2018年に実施した調査(2017年12月8日～2018年2月8日に実施、経団連会員企業258社、地方別経済団体加盟企業185社、計443社回答)によれば、企業が学生に求める資質・能力・知識は「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」がトップ3を占めた(図1)。

また、経済誌での大学ランキングでも、同様の企画が行われるようになってきている。例えば『日経キャリアマガジン』では、「就職ランキング」特集のなかで上場企業805社の人事担当者への調査による「企業人事担当者から見た大学イメージ調査」のランキングを発表している。そのなかで、学生に「行動力(熱意・主体性・チャレンジ精神)がある」という評価を公表している。

昭和や平成の初期まで、企業の採用では「体育会系学生」がもてはやされ、その一番の要因が「従順さ」であった時代とは、まったく異なるステージに変化しているのである(図2)。

● 主体性とは何か、いかに育てるのか

ところで、主体性とは何か。

主体性とは、日本独自の言葉である。英語ではagencyとかindependenceが近似していると言われるが、完全に対応する英語は存在しないとも言われる。日本語でも辞書『大辞林』では「自分の意志・判断によって、みずから責任をもって行動する態度や性質」と説明されているが、これだけでは不十分な印象もある。そこには自責的思考が不可欠だという人もいる。何かある事態が発生したら、それは「自分が生み出した結果」であるとする態度のことだ。「自分のせいではない」と考える「他人(ひと)ごと」とは対極であり、拡張すれば発生への自責だけでなく、発生には関与していなくても解決するのは自分の責任だと考えるような思考も含まれていく。

しかし、このような主体性を育てるのは簡単ではない。「主体性をもちなさい」と言われてもてるようになるわけではないからだ。

新型コロナウイルス感染症に関してさまざまな場面で発言している神戸大学病院の感染症専門医である岩田健太郎医師には、『主体性は教えられるか』(筑摩選書2012年)という著書がある。そのなかで、自分が指導する研修医が、言われたことしかやらない(やれない)ため、「主体性をもって自分の頭で考えなさい」と指導すると、その研修医は混乱してしまうか、あるいは指導医である岩田医師の望むような行動をとろうとしようになった、ということが紹介されている。「主体性をもちなさい」と指導されると、指導した人の価値観に合わせて行動しようとする。果たしてそれは主体性をもったことになるのだろうか。これは思考停止であり、主体性とは最も遠い態度ではないだろうか。

こうした点を踏まえたうえで、筆者の考えでは、教育において主体性そのものを教えることはできない、ないしは困難である。しかし、主体性を身につけるきっかけを与えることはできる。そして、それは取りも直さず、主体的に学び続ける自律型学習者の

図2 「行動力(熱意・主体性・チャレンジ精神)がある」評価ランキング

| 順位 | 大学名 | 順位 | 大学名 |
|-----|---------|--------|--------|
| 1位 | 北海道大学 | 14位 | 東京海洋大学 |
| 2位 | 広島大学 | 15位 | 京都大学 |
| | 横浜国立大学 | 16位 | 東京工業大学 |
| 4位 | 早稲田大学 | | 慶應義塾大学 |
| 5位 | 九州大学 | | 独協大学 |
| 6位 | 高知大学 | 20位 | 武蔵大学 |
| 7位 | 大阪大学 | 21位 | 岩手大学 |
| 8位 | 筑波大学 | | 京都女子大学 |
| | 名古屋大学 | 産業能率大学 | |
| 10位 | 大阪府立大学 | 23位 | 関西大学 |
| 11位 | 東京外国語大学 | 24位 | 日本女子大学 |
| 12位 | 一橋大学 | 25位 | 東北大学 |
| 13位 | 国士舘大学 | | |

出所/日経HR「日経キャリアマガジン特別編集 価値ある大学2021年版 就職力ランキング」より

育成にもつながっていくはずだ。

その条件を考えるうえで、「自分ごと化」と「真正の学び」が重要な示唆を含んでいると考えている。研修医の例で言えば、指導医からどう見られるかよりも、目の前の患者への治療を「自分ごと」として考えるということであり、医療現場という厳しいが豊かな現実に自分自身が向き合うことで「真正の学び」を得ることができるからだ。

● 自分ごとにする=インテイクスイッチを入れる

先に述べた自責的思考とは、すなわち「自分ごと」にするということにはかならない。

では授業の場面では、どのように生徒・学生に「自分ごと」化させていけばいいのだろうか。

そのヒントになるのが、福岡市立福岡西陵高校の和田美千代校長が講演などで話されている「生徒のインテイクスイッチを入れる」という考えだ。

「授業をアクティブラーニング化するポイントは、インプット→インテイク→アウトプットの展開を授業のなかでつくることで、それも順番は逆向き設計です(図3)。授業の最初にまず『今日はこれこれについて発表してもらいます』とアウトプット予告します。そうすると、発表が後にあるので生徒はその問題を当事者として、情報を自分の中に入れようとしています。例えば『講演の後で謝辞を言う人は講演をマジで聴く』ということですね。だから生徒をこの謝辞を言う人にあえてするのです」

